

2015年11月7日(土)13:00～名細市民センター「第17回・男のゆうゆう塾」

第12回「川越の文化とさつま芋」日本いも類研究会会長・井上 浩さん 司会 竹内好夫(会員)
名細地区子どもサポート委員会の協賛

出席者(25名) 南、弓野、上野、斉藤、遠藤、浦野、吉田、辻、御菩薩木、加藤政、金田、栗栖、竹内
佐藤、永山、鈴木、渡辺、新井、宮崎、神谷、サポートから本間、新井、益子、一般2名

川越は江戸時代から米、芋、織物を新河岸川の舟運によって江戸に運び栄えた。綿織物の「川越唐棧」は、外国から綿糸を買って川越で舶来品に負けない縦縞を織り一世を風靡した。川越の芋は、焼き芋として江戸っ子から好まれ有名になった。産地は今の川越市域ではなくて、所沢・三芳野である。



2015年11月7日(土)13:00～名細市民センター「第17回・男のゆうゆう塾」

第12回「川越の文化とさつま芋」日本いも類研究会会長・井上 浩さん 司会 竹内好夫(会員)
名細地区子どもサポート委員会の協賛

関東大震災後、焼き芋は衰退したが、太平洋戦争による食糧難で、さつま芋は品質や味ではなく、作り易く単収の多い「沖縄100号」が生産され配給された。その結果、さつま芋嫌いが増えたが、美味しいさつま芋の復権には時間がかかった。今回は、さつま芋の植え付けから収穫まで行っている子どもサポートが参加してくれた。

